

令和5年度日本魚病学会春季大会シンポジウム
「今後の発展が期待される魚病対策技術を考える」

趣意書：

魚病は、魚類養殖における主要課題の一つであり、年間被害額は、現在も100億円近くにのぼる。魚病が水産資源にも影響を及ぼしている可能性も指摘されており、養殖・水産産業が安定的に発展していくためには、企業、大学、水産試験場、研究機関等が連携し、魚病対策に関わる人材育成を継続し、制度や技術を発展させていく必要がある。人材育成では、水産試験場（魚類防疫員）と獣医師の連携が始まっている。制度についても、わが国の防疫体制や水産用医薬品の認可システムの問題などが議論されている（唐川・良永，2021：魚病研究 56巻4号 220-225頁）。そこで令和5年度日本魚病学会春季大会のシンポジウムでは、今後の発展が期待される魚病対策技術に着目した。

魚病対策技術は大きく防疫、予防、治療に分けられ、育種、疫学、薬剤治療、ワクチンなど、多岐にわたる科学・産業分野の技術が利用されている。そこで本シンポジウムでは、近年、進歩が著しい分子生物学の手法を利用した抗病性育種や疫学の技術研究に取り組む研究者に講演を依頼した。また、使用可能な水産用医薬品が少なく、魚病の治療技術研究が進んでいない現状から、水族館で行われている治療法や、今後も最も期待される予防法の一つである水産用ワクチンの開発に取り組む製薬企業に、症例情報や今後の見通しについてお話を頂くことで、これからの養殖産業における新たな魚病対策技術を考える場とすることを目的とする。

(プログラム構成)

令和5年3月14日（火）に開催予定の魚病学会春季大会シンポジウムとして、今後より発展が期待される魚病対策技術に焦点をあて、育種、疫学、治療、ワクチンを演題としたプログラムを企画しました。各演者の講演時間は、質疑応答を含めて1課題25分とし、シンポジウム全体として総合討論を含め2時間を予定しています。

1. 育種：ゲノム情報を利用したイリドウイルス病耐性マダイの開発 日本大学 澤山英太郎
2. 疫学：環境核酸分析の応用による魚病研究の未来 龍谷大学 山中裕樹
3. 治療：水族館が取り組む治療の症例紹介 新江ノ島水族館 鈴木良博
4. ワクチン：水産ワクチン開発の歴史と未来 共立製薬株式会社 村上大雅・福田耕平
5. 総合討論

本シンポジウムへの参加は無料ですが、コロナ対策として、参加人数に応じ開催する講義室を変更する可能性があります。つきましては、本シンポジウムへの参加のみを希望する方は、次頁に記載のURLより参加登録を行ってください。

公開シンポジウム参加申込み方法
(大会の参加申請をされている方は対応不要です)

公開シンポジウムへの参加をご希望の方は、以下の URL より参加登録を行ってください。

参加登録 URL :

https://docs.google.com/forms/d/e/1FAIpQLSfdolvh3aozYl60s1Wcyby_ZFdvX0y7gwCT5Lmj_sTlvCWHDoA/viewform?usp=sf_link

参加登録 QR コード :



※ 公開シンポジウム参加希望者はお一人ずつお申し込み下さい。

※ **申し込み受付期間 : 3月6日(月)まで**

※ 本シンポジウムは日本大学生物資源科学部湘南キャンパスで開催しますが、会場は後日、状況に応じて決定します(日本魚病学会ホームページをご確認ください)

ご不明な点は、大会事務局参加受付アドレス (fish.pathol2023@gmail.com) までお問合せください。